

西宮神社十日戎開門神事における参加者について（Ⅱ）

－2005年以降の質問紙調査と参与観察から－

荒川 裕紀

The Participants of the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony in Nishinomiya Shinto Shrine (2)

ARAKAWA, Hironori

Abstract

Every year on January 10th, the main gate (known as the “Great Red Gate”) at Nishinomiya Shrine in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, is opened at 6 AM for visitors to proceed to the main shrine. The event is known as the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony. The first three people to arrive at the main shrine are designated *Fuku-otoko* (lit. “Men of fortune”).

Media coverage of the event has increased from year to year, with not just local Kansai-area media but also the national television networks in Japan. Nowadays, we call this “Opening of the Gate” is not “Event” but “Ceremony”.

From Last report (48th of annual reports), was focus on the participants’ attributes and motives for ceremonies. I started researching about participants with questionnaires form 2001. In that report, I showed 4-year questionnaire results from 2001 through 2004. I clarify that about their motives and thoughts for this ceremony from an analysis result.

In 2004, there was serious incident around this festival. From 2003, one participant planned to become first winner as “*Fuku-otoko*” with group work. At first, he and his friends gathered bunch of runners, and waited front of the gate from 7 days before 10th of January. So that they could “Block” other participants after the festival was started. In 2004, this participant won as the first winner. But lots of TV media and newspaper broadcasted him as a “cheater”. Also on the web, there were lots of claims and criticizing about this participant and festival. After those arguments, this participant sent back the title of “*Ichiban-Fuku (first winner of Fuku-otoko)*” to the shrine. Also Nishinomiya shrine and other participants considered about those issues deeply. After some conferences, the committee of the “Opening of the Gate” Ceremony was formed by participants and regional leaders in 2008. This report would be focused on these movements and the participants around 2005 to 2015. These approaching with documentary method and mass statistical analysis would be important to understand about recent movements of the festival.

Key words: EBISU, FUKU-OTOKO, Shinto, Shrine, Nishinomiya, Invention of Tradition, Cultural Events

1、はじめに

これまで、西宮神社の開門神事に関して、明治期よりの歴史的変遷および、祭事の変容について、歴史学的、民俗学的、そして人類学的方法による把握を行ってきた。

前回の論考では、定量調査を始めた 2001 年から 2004 年までの属性および動機分析を主に行った。なぜ 2004 年で区切ったのかというと、2004 年に当調査対象の神事において「事件」が起こったためである。それは、神事参加に関する明確な取り決めがなされていなかったことに起因する。

参加者同士の取り決めとして、門に早く来た者から順に自分の出走位置を決められるというものが暗黙の了解の上に成り立っていた。1990 年代の後半から主にテレビの報道によって、この神事が関西圏のみならず日本全国に知られるようになり、それに伴って参加者も増加した。しかし、神社側としてはその増えすぎた参加者への明確な対策としては、警備員の増員などといった対策にとどまり、スタート位置の取り決めなどについてはあくまで「参拝者の良識に任せる」との言及にとどまっていた。つまり神社としては開門して、3 番までの福男の認定はするが、走り参りするところまでは関知しない。というスタンスであった。もちろん、増える参加者と、暗黙の了解がエスカレートし、3 日前くらいからテントを張って順番取りをする団体も現れ

たこともあり、参加者有志が集まり、神社側と新しいルールを作るべきとの協議を行っていた。その中で、恐れていた「事件」が起こったのである。

2003 年の時から、数日前より大人数で参加し、先頭集団を独占し、1 人の人物を有利に走らせることを行う団体が現れた。2004 年にはさらにエスカレートとして 1 週間前より 10 名以上のグループがテントで寝起きをして、一番福を狙おうとしていたのである。そして当日本番には、「見事に」一番福をこのグループから出すこととなったが、そのグループの数名が、他の参加者の妨害を行っていたと報道各社によって全国に流されたのである。インターネット掲示板を通じて批判は高まり、一番福になった参加者が数日後に称号を返上する史上初の事態にまで発展した。

この事件から、神社・参加者・地元の氏子青年会が一緒になって開門前の順番決めと、開門などにも関わる組織を急遽作る流れへと変化していった。その中で、一番の変更点は、暗黙の了解の上に成り立っていた、「早く来たものから順に出走順位を決めていく」から「くじ引きによって出走の位置を決められる」やり方に変化させたことであった。この変更に関しては、参加者側からは反発も見られた。しかし、この年のような事件の再発防止の観点からも結果としては、変更となったのである。

本論考では、事件発生後から①2005 年 1 月 10 日を迎え

るまでにどのような動きが具体的に起こっていたのかを述べていく。その上で、②2005 年からのアンケート調査の結果の中で、属性の分析を行いたい。

その理由としては、まず 2004 年とその後では、質問紙における調査対象に大きく変化があったことである。2004 年までは、赤門前に早くから並んでいる参加者が対象であったが、2005 年度よりは、調査者自身が神事の実行者に変化したこともあり、「くじに当たった人たち」を中心に質問紙調査をすることにした。そのため属性などに関しては、それまでの参加者とは違いがみられることが予想される。定量調査という観点からは、より多くの参加者に質問紙調査を行ってもらうことが可能となり、参加者の広範囲での把握という面では、有益なデータが取れることとなった。このデータから、2005 年以降の参加者の属性はどう変わったのかを考察したい。参加が以前よりかは易くなったことで、参加者属性に具体的な変化が現れるのではと推測する。

この①②の考察から、この神事が現在に至る中でどのような変遷を遂げ、どのような性格を持っているのかについての考察を行いたい。

2、2004 年の事件後

2004 年の「事件」のあと、数々の報道がなされたことは、前回の報告でも述べた。それまでの在阪のメディア（新聞・テレビ）中心の取材以外にも、在京のメディアまでの報道が目立った。それまでの「福男」報道に関しては、被取材者に対する「型」のようなものがあつた。文化的なお互いの同意の上で成り立っている部分があつたが、文化圏の違う、そして今回の事件を本当に「事件」としてワイドショーの中に登場させようとして、執拗に参加者に取材を申し込む制作会社も多くあつた。本発表者にも「福男選びに関する著作があり、歴史に詳しい」と報道されたために、何社かからの興味本位による取材¹があつた。私よりも取材を受け、ホームページを開設したことから集中的に取材を受けていた H.R.氏に関しては、自身のホームページの掲示板が「荒らされる」²被害にも遭い、非常に憔悴しきっていた。このように、これまでの参加者に関しては、全国的な批判を個人が受けなければならない、来年度からの開催も危ぶまれるのではないかと危機感を持つことにいたつた。このことは、参加者のみならず、神社側も同様であつた。これまでのような阪神間、少し大きくなった近畿一円の祭事規模から、興味を持っている範囲としては日本全国へと広がってしまったためである。

これまでのように、神社は門を開けて、3 番までに拝殿にたどり着いたものを福男に認定するのみ、または混乱が起きないように警備員を増員するのみでは、立ち行かないところまできていることを認識したわけである。

そのために西宮神社が中心となつて、これまで複数回参加している参加者が呼ばれることとなった。

具体的には H.R.氏が、まず呼ばれた。これまでの論考で何度か登場している人物で、彼の詳細を語ることは、繰り返しになるが、なぜ彼が真っ先に呼ばれたのかを考える際には、必要であるためにもう一度挙げる。彼は 1997 年から参加をし、2 年連続二番福となり、1999 年には、最前列の列の真ん中から出走、ほかを寄せ付けない圧倒

的な走り賛同を駆け抜けるものの、拝殿の直前の坂で大きく転倒し、惜しくも一番福が取れなかった人物である。その年の 12 月には、バイクでの交通事故に遭い、一時は下肢切断まで考えなければならなかったほどの重篤な怪我を負った。幸い手術は成功したものの、以降は松葉杖は手放せなくなり、当然全速力で走ることはできなくなった。しかし、なんとか、この赤門には帰ってきて参加したいとの思いは募り、走ることができた人物である。最前列から福男を狙うことはできなくなったが、参加することで「非日常を味わえた」こと、そしてこの場所に戻ってこられた感謝の意味から、復帰後は彼のホームページを通じて、独自の広報活動を行うなど参加者代表として活躍をしていた。

そしてその他に呼ばれた参加者としては、1997 年から参加し、1998 年次にも私と一緒に走り、2004 年までの間、連続で出場していた S 氏、神戸大学を中心として福男サークルを立ち上げていた I 氏、平成の初年度に福男（二番福）となつて、2004 年度でも最前列付近から参加していた E 氏など、何度も参加しているメンバーなどが集められた。そして 2004 年までの最近 4、5 年間で福男（一から三番福）となつた参加者の方々もアドバイザーとして参加し、これからの開門神事のあり方について話し合うこととなつたのである。

参与観察として深く関わってきた私も、調査者というよりも常連の参加者として、その場に呼ばれた。何度か話し合いがもたれる中で、開門神事自体を取りやめる（1966 年の様に福男の認定を神社として行わない）構想まで話し合われた。しかし参加をしていた、それまでの開門神事の参加者は、何とかして残す方向に持っていかなければならないとの強い要望を出すに至つたのである³。

しかしその際には、これまで通りの参加、というわけにはいかない。これまで通りに参加するなら 2004 年のような事件になることも考えられる。つまり、参加者と主催者は分けなければならない。本来なら、神社が氏子青年会なりに頼む形で、地元の年間行事として組み入れることが考えられるだろう。実際に氏子青年会「若戎会」は、開門神事の前に参道を掃き清める奉仕を含め、十日戎での奉仕を行っていた。しかし、若戎会だけで全てのことを取り仕切るには、この神事の規模がこの 5 年ほどで大きくなりすぎていた。規模だけでなく、マスメディアを含めて、世間の注目も集まっている。

参加者たちが、開門の位置決めなどの主催者側に入り、これまでの経験から得た知見を、若戎会と共有して、当初は乗り切っていくべきではないかという意見が出た。

その意見が容れられて、それまで別個の存在であつた開門神事福男選びに出場していたベテラン参加者と、氏子青年会が史上初めて、西宮神社内にて意見を交換することが行われた。神社、氏子青年会、そして参加者の有志がさらに話し合つて生まれたのが「西宮神社開門神事保存会」であつた。

この保存会の主体は、参加者有志であつたが、まずは氏子青年会である「若戎会」の下部組織として成立することとなつた。ここで初めて、実行主体の中に元参加者が加わるとともに、西宮神社の氏子組織が、史上初めて神事に関わることになつたのである。その意味で画期的な出来事であつたと言えるだろう。

神社側との話し合いの中で、2004 年の事件となった順番に
関しての意見提言と当日の順番決めの執行を、この保存会
が任されることとなった。元参加者たちは、何時から場所
決めを行うのか、前日の午前なのか、それとも午後なのか
という意見などを出していた。しかし、神社としては、原
則に立ち返ると 10 日の午前 0 時に閉門し、午前 6 時に開門
するのが正式である。つまり、前日に神社の関連団体が、
場所決めをするというのはおかしいのではないかとのこと
であった。つまり神社としては門を開けること、3 番までに
拝殿に入った者に対して、福男として認めるというスタ
ンスは守っていた。極論としては、門の前に並んでもらうと
「危険である」ため、門には午前 0 時まででは並ばせず、午
前 0 時の時点で、来た者から一斉に並ばせるという意見さ
え出ることとなった。

その中で双方が話し合っ、出された答えが、現在まで
続く、10 日の午前 0 時から行う「くじ引き」による場所決
めである。くじ引きの導入に関しては、参加者の中で大き
く議論となった。これまでの参加者からすると、「熱心に
走ろうと思えば、自然と早くから来るようになる」のでは
との主張であった。そのため、くじ引きを行うことに関し
てはしょうがないとするも、その開始時間を前日 9 日の夕
方にするなどの意見も折衷案として出た。しかし、この案
に関しては、神社や氏子青年会から、どちらにしてもエ
スカレートしていくことは目に見えており、結果として提
案は、却下された。

参加者側は落胆したものの、これからも存続させること
を念頭において考えた時、この 0 時から抽選を行う形でい
くしかないとの結論に達した。試行的に、それまでの参加
者と氏子青年会が中心となって 2005 年の 1 月 10 日に初め
て行われた。初めは午前 0 時ではなく、もう少し遅い時間
帯から始め、そして報道陣も至近距離で入れた状態で、境
内で行われていた。当初は 500 名くらいがくじ引きに参加
したが、当たりくじを引いた参加者、特に若い番号を引い
た参加者に、テレビカメラや取材陣が殺到し、またそれ
につられて参加者も大きく動くという悪循環で、深夜の境
内が大騒ぎであった。このため、くじ引きの場所に関し
ては表大門近くから神社会館へと移り、そして現在の南門
へと移動することとなった。

また、2005 年の神事では、門を開ける主体に関しても問
題となった。門を開けていたのが、露天商を束ねている組
合であったのだが、組合側からこれも保存会側がやるべき
であるとの要請があった。もともとは、地域の「青年団」
が中心となって戦前は門を開けていた。しかし、時代が経
て、その開門の主体が露天商の組合員へと変化していた。
何百人が門を押すために危険な役割である。しかし開門神
事の執行の正当性を主張するからには、露天商組合ではな
く保存会が開けるべきではとの意見だった訳である。

そのこともあり、2005 年には氏子青年会のメンバーが門
の半分を開けることになったが、結果としては、その年を
除いて、保存会としては、安全性への危惧があり、長年、
露天商組合が門を開けており、その専門性の部分から保存
会から露天商組合側に依頼する形をとり、直接は関わらな
いこととした。

実際に開門に保存会から発展した、西宮神社の公式団体
「開門神事講社」が開門にかかわる様になったのは、2009
年の開門からであった。つまり、2005 年から 2008 年まで

の 4 年間は、組織はあるものの、開門は露天商組合に行っ
てもらいやり方をとっていた。

実際の 2005 年の開門神事で起こった問題の発端は、それ
まで、参加をしてこなかった人々が目に見えて参加したこ
とであった。前年に福男神事が全国的に普及するきっかけ
を作ったのは、インターネット掲示板「2ちゃんねる」であ
った。2005 年には、そのユーザーたちが、積極的な神事へ
の参加を促したために、コスプレ的な格好で神事に参加す
る一団が現れた。この年から参与観察者である私は、ただ
参加して走る側から、ほかの常連の参加者同様に門前で
の参加者の対応にあたることとしたが、これまでの陸上競技
会的な意味合いで来る一団とは一線を画したこれらの参加
者の対応にも追われた。開門時に、巫女の格好をして走っ
た女性が転倒し、大事には至らなかったものの、出血する
事態にもなった。彼女に関しては、極力その格好では走ら
ないで欲しいことや、事故が起きたら、自己責任であるこ
となどを話してはいたが、結果としては事故となってしま
った⁴。

このように、試行錯誤の中で行われた 2005 年の開門神事
は、まさに発展途上の状態であることがわかる。同時にこ
のような参加者が出現したことからもわかるように、それ
までの陸上競技会的なものから、変容を始めたことである。
次の論考において、2005 年以降でどのように変容していっ
たのかを見ていくこととしたい。

2、アンケートでの属性分析①（総数）

参加年度		度数	パーセン ト	有効パー セント	累積パー セント
有効	2001年度	19	2.3	2.3	2.3
	2002年度	34	4.2	4.2	6.5
	2003年度	35	4.3	4.3	10.8
	2004年度	34	4.2	4.2	15
	2005年度	46	5.7	5.7	20.7
	2006年度	39	4.8	4.8	25.5
	2007年度	26	3.2	3.2	28.7
	2008年度	20	2.5	2.5	31.2
	2009年度	87	10.7	10.7	41.9
	2010年度	54	6.7	6.7	48.5
	2011年度	35	4.3	4.3	52.8
	2012年度	86	10.6	10.6	63.4
	2013年度	101	12.4	12.4	75.9
	2014年度	97	11.9	11.9	87.8
	2015年度	99	12.2	12.2	100
	合計	812	100	100	

図 1：年度毎の配布した質問紙数

前項で述べたように、2005 年以降、それまでの陸上競技
会的な参加者であったものが、参加がしやすくなったこと
もあり、目に見える、または感覚的には変容したように見
えたと述べた。実際はどうなのか。この項においてアンケ
ート調査の結果に基づき、属性について論述していきたい。

2001 年度から 2015 年度までの質問紙調査は総数で 812
人に行っている。参加年度の表を見て分かるように、当初
は 20 に満たない数しか、質問紙調査が出来なかった。神
事的主催者として加わりだした 2005 年以降も年によっ
ては 20 人の年（2008 年）も存在する。2009 年に正式に開
門神事講社として成立してから後は、奉仕者も増加したこ
とによって、50 を超える人数の調査が可能となった。2004
年までは、同じ参加者に手渡しで、2005 年から 2008 年ま

では、くじ引きで外れた人たちで、さらにまだ走りたい人を中心に行い、時間があれば声をかけてくじ引きにあたった (A グループ) に入っている人たちにも回答をしてもらっていた。2009 年からは、時間的にくじに外れた参加者には、接する時間が取れづらいために、基本的には、くじに当たった参加者を中心に聞くことにしている。

門前に並ぶことが出来る A グループは、1 列に 12 名が並び、9 列までの参加者であるため、最大 108 名の参加者への質問紙表を配布することが可能となった。2009 年より 2011 年までは、くじに当たった人たち全員を対象に行っていなかった。しかし 2012 年度より、くじに当たった人物全員を原則対象として質問紙を配布し、待ち時間を利用して回答してもらうやり方を確立した。そのために以降の回答者数は 100 人を超える年も出てきている。表を見ていただいて分かるように、その数にはかなりばらつきがある。

3、アンケートでの属性分析② (性別とスポーツ経験)

		性別			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	113	92.6	92.6	92.6
	女性	8	6.6	6.6	99.2
	不明	1	0.8	0.8	100
	合計	122	100	100	

この項では、2001 年から 2004 年までの性別とスポーツ経験に関する属性 2005 年から 2015 年までの同じ項目に関する比較を行う。

2001 年から 2004 年までの性別に関しては、男性が 9 割以上を占めている。また特徴的なことは、競技種目においてクロス検定をしてみると、男性の現在行っている、クラブ競技は競技者 61 名のうち陸上 21 名で、その次が野球 (4 名)、サッカー (4 名)、トライアスロン (4 名)、ラクロス (4 名) と 3 分の 1 が陸上部に所属していること、過去であるならば、陸上 (17 名)、サッカー (8 名)、野球 (6 名)、ラグビー (5 名)、バスケットボール (4 名) と続くが、こちらも陸上経験者が 4 分の 1 以上を占めていることが分かる。

性別と体育系活動の有無 (過去) のクロス表

		体育系活動の有無 (過去)			
		はい	いいえ	N/A	合計
性別	男性	65	8	1	74
	女性	5	2	0	7
	不明	1	0	0	1
	合計	71	10	1	82

性別と体育系活動の有無 (現在) のクロス表

		体育系活動の有無 (現在)			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	61	52		113
	女性	3	5		8
	不明	1	0		1
	合計	65	57		122

女性はより顕著である。現在クラブ活動を行っているとは答えた回答者の 3 名全員が陸上の経験者である。過去に関しても 5 名が体育系の活動をしていたと答えたが、そのうちの 4 名までが陸上の経験者であった。2004 年まで、参加する際に半数以上が、何かの体育系の競技を行っている

ことが分かったと同時に、ほとんどが何かの体育競技を行っている経験があると答えている。

2005 年以降では以下の結果となった。

		性別 (2005-2015)			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	670	97.1	97.1	97.1
	女性	19	2.8	2.8	99.9
	N/A	1	0.1	0.1	100
	合計	690	100	100	

女性の比率が、2004 年までと比べた際に減っている。これは意外であった。神事に関する広報でも「福男」選びといえども、性別に関しては関係なく参加できることと、調査者である私や、講社のメンバーも認識している。

実際、講社メンバーにも女性はたくさんいるが、いざ走るとなると少なくなるのであろうか。くじ引きの方式になり、女性も参加しやすくなったと思っていたが、逆にくじ引きをするときに待つ時間が増えることなどから、女性が減っているのかもしれない。何より「福男」という名称が、マスメディアの媒体のみを見て参加する人たちには、男性のみの神事として映ってしまうのかもしれない。実際、開門時には安全上の理由から、A グループに当選した女性参加者に関しては、転倒の危険性も含め、かなり詳しく講社のメンバーが話をする。ほとんどの女性参加者が、その危険性を納得し、参加している。開門神事「福男」選びが大きく報道されたことで生まれた弊害であるのかもしれない。

性別と体育系活動の有無 (現在) のクロス表 (2005-2015)

		体育系活動の有無 (現在)			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	249	408	13	670
	女性	8	11	0	19
	N/A	0	1	0	1
	合計	257	420	13	690

性別と体育系活動の有無 (過去) のクロス表 (2005-2015)

		体育系活動の有無 (過去)			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	456	59	16	531
	女性	9	5	0	14
	N/A	0	0	1	1
	合計	465	64	17	546

クラブに関しては 2004 年までに比べて現在行っている人の比率は男性に関しては下がっている。またやっているスポーツも、クロス検定をかけてみると陸上の割合が 20% (48 名) を切っており、その代わりに野球が 49 名と躍進、サッカー 23 名、テニス 12 名、ラグビー 10 名、アメフト 9 名、バスケット 9 名という形で、必ずしも陸上に偏らなくなってきた。以前に比べて、陸上部の短距離の選手が出場するという形ではなくなっていることが分かる。過去のクラブ経験を見てみると、陸上 89 名、野球 77 名、サッカー 72 名、バスケットボール 34 名という形になっており、陸上経験者は多いが、半数以上を占める形ではなくなっている。足の速さは必要条件ではあるが、走りのスペシャリストが走っていた 1990 年代後半から 2004 年までとは違った属性になってきていることが明らかになった。しかし、女性に関しては現在もクラブを行っているとは回答した 8 名のうち 4 名が陸上部、過去に関しても 9 名の回答者のうち 3

名が陸上経験者と、依然として陸上経験者の割合が多い。男性に比べて、より専門性がある競技経験者が神事に参加していることが明らかになった。

4、アンケートでの属性分析③（職業・年齢）

この項では、2001 年から 2004 年までの職業・年齢に関しての属性と 2005 年から 2015 年までの同じ項目に関しての比較を行う。

2001 年から 2004 年に関する職業・年齢に関する属性に関しては、長時間を門前で過ごさなければならなかったため、生徒・学生（高校生から大学院生まで）が大半であると予想していた。結果としては、7 割が生徒・学生である結果が出た。そしてそれに呼応する形で年齢層も 10 代後半から 20 代前半が非常に多い。これには体力的な要因も大きいといえよう。

職業

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
N/A	1	0.8	0.8	0.8
高校生	14	11.5	11.5	12.3
短大・大学・大学院生	68	55.7	55.7	68
フリーター	4	3.3	3.3	71.3
販売・営業	5	4.1	4.1	75.4
エンジニア	5	4.1	4.1	79.5
公務員	10	8.2	8.2	87.7
教員	2	1.6	1.6	89.3
自営業	3	2.5	2.5	91.8
その他	6	4.9	4.9	96.7
専門学校生	3	2.5	2.5	99.2
高専生	1	0.8	0.8	100
合計	122	100	100	

年齢

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
16	1	0.8	0.8	0.8
17	7	5.7	5.7	6.6
18	12	9.8	9.8	16.4
19	16	13.1	13.1	29.5
20	17	13.9	13.9	43.4
21	19	15.6	15.6	59
22	13	10.7	10.7	69.7
23	9	7.4	7.4	77
24	5	4.1	4.1	81.1
25	4	3.3	3.3	84.4
26	1	0.8	0.8	85.2
27	2	1.6	1.6	86.9
28	3	2.5	2.5	89.3
29	2	1.6	1.6	91
30	3	2.5	2.5	93.4
31	1	0.8	0.8	94.3
32	3	2.5	2.5	96.7
33	2	1.6	1.6	98.4
35	1	0.8	0.8	99.2
50	1	0.8	0.8	100
合計	122	100	100	

2005 年以降はどうなっているだろうか。2005 年以降、くじ引きになったことで、生徒・学生の比率は下がったの

ではないかと考えているが、結果は依然生徒・学生は多いものの、その比率は 45%程度であり、2004 年前からすると大幅に比率が低くなったといえる。

職業 (2005-2015)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
N/A	7	1	1	1
高校生	60	8.7	8.7	9.7
短大・大学・大学院生	220	31.9	31.9	41.6
小・中学生	8	1.2	1.2	42.8
大学受験生	6	0.9	0.9	43.6
フリーター	23	3.3	3.3	47
販売・営業	101	14.6	14.6	61.6
企画・マーケティング	5	0.7	0.7	62.3
エンジニア	46	6.7	6.7	69
宣伝・広告	8	1.2	1.2	70.1
各種研究開発職	10	1.4	1.4	71.6
公務員	38	5.5	5.5	77.1
教員	13	1.9	1.9	79
自営業	38	5.5	5.5	84.5
その他	97	14.1	14.1	98.6
専門学校生	7	1	1	99.6
高専生	3	0.4	0.4	100
合計	690	100	100	

年齢 (2005-2015)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
N/A	5	0.7	0.7	0.7
13	1	0.1	0.1	0.9
14	1	0.1	0.1	1
15	6	0.9	0.9	1.9
16	13	1.9	1.9	3.8
17	28	4.1	4.1	7.8
18	36	5.2	5.2	13
19	43	6.2	6.2	19.3
20	45	6.5	6.5	25.8
21	69	10	10	35.8
22	64	9.3	9.3	45.1
23	44	6.4	6.4	51.4
24	49	7.1	7.1	58.6
25	31	4.5	4.5	63
26	23	3.3	3.3	66.4
27	22	3.2	3.2	69.6
28	26	3.8	3.8	73.3
29	18	2.6	2.6	75.9
30	25	3.6	3.6	79.6
31	13	1.9	1.9	81.4
32	14	2	2	83.5
33	12	1.7	1.7	85.2
34	14	2	2	87.2
35	18	2.6	2.6	89.9
36	12	1.7	1.7	91.6
37	10	1.4	1.4	93
38	5	0.7	0.7	93.8
39	1	0.1	0.1	93.9
40	7	1	1	94.9
41	7	1	1	95.9
42	7	1	1	97
43	4	0.6	0.6	97.5
44	3	0.4	0.4	98
45	1	0.1	0.1	98.1
46	1	0.1	0.1	98.3
47	1	0.1	0.1	98.4
48	1	0.1	0.1	98.6
49	4	0.6	0.6	99.1
50	2	0.3	0.3	99.4
55	1	0.1	0.1	99.6
56	1	0.1	0.1	99.7
61	1	0.1	0.1	99.9
64	1	0.1	0.1	100
合計	690	100	100	

それと比例して社会人の比率が増加した。待ち時間が減ったために、様々な人々の参加を可能にしたと言えるだろ

う。年齢に関しても同様で、依然として 20 代が多いが、社会人が多いであろう、30 代も比較的多い。私も参与観察をしていて、年齢層が以前よりも高くなったことを感じていたが、そのことが明らかになった。年齢層も 2004 年までのデータから比べると高くなっている。クロス検定にて、参加年度と職業・年齢の分析を行ったが、2004 年まで見えなかった一団（20 代から 30 代で社会人の集団）が現れる結果となった。以前から、中高年の参加者がいたが、少し後ろから参加することが多かった。くじ引きになり、最前列に行くことが可能とはなっている。選択するか否かは、本人にかかっているが、2013 年の福男（三番福）は 48 歳である。彼は、陸上が専門の高等学校の体育科の教諭であり、現在でもトレーニングを続けている方である。これまでの福男の持たれてきたイメージが、少しずつ変容を始めている。

5、アンケートでの属性分析④（居住地）

この項では、2001 年から 2015 年までの全体と、2001 年から 2004 年までの職業・年齢についての属性と 2005 年から 2015 年までの同じ項目についての比較を行う。そのことで、全体ののべで、どのあたりからたくさん来ていたのかを把握し、2001 年からの 2005 年からのデータを見比べることで、経年の比較をしようとするものである。アンケートでは、出身地に関しては、出生地・幼少期の居住地・小学生時の居住地そして青年期の居住地を開いた。この 4 つの時間軸に関しては、全体（2001 年から 2015 年まで）に関する、出生地と青年期の 2 つを提示したい。

出生地				
	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
兵庫県のみ	2	0.2	0.2	0.2
回答				
西宮市	95	11.7	11.7	11.9
兵庫・旧摂津	154	19	19	30.9
兵庫旧摂津以外	77	9.5	9.5	40.4
大阪府のみ	11	1.4	1.4	41.7
回答				
大阪・旧摂津	89	11	11	52.7
大阪旧摂津以外	70	8.6	8.6	61.3
京都府	38	4.7	4.7	66
滋賀県	15	1.8	1.8	67.9
奈良県	14	1.7	1.7	69.6
和歌山県	13	1.6	1.6	71.2
広島県	11	1.4	1.4	72.5
神奈川県	10	1.2	1.2	73.8
北海道	8	1	1	74.8
東京都	22	2.7	2.7	77.5
福井県	5	0.6	0.6	78.1
宮崎県	2	0.2	0.2	78.3
福岡県	18	2.2	2.2	80.5
愛媛県	12	1.5	1.5	82
石川県	11	1.4	1.4	83.4
島根県	4	0.5	0.5	83.9
愛知県	22	2.7	2.7	86.6
岡山県	17	2.1	2.1	88.7
静岡県	4	0.5	0.5	89.2
山口県	6	0.7	0.7	89.9
佐賀県	4	0.5	0.5	90.4
栃木県	2	0.2	0.2	90.6
香川県	9	1.1	1.1	91.7
鳥取県	5	0.6	0.6	92.4
大分県	4	0.5	0.5	92.9
群馬県	2	0.2	0.2	93.1
埼玉県	6	0.7	0.7	93.8
岐阜県	7	0.9	0.9	94.7
高知県	1	0.1	0.1	94.8
宮城県	2	0.2	0.2	95.1
千葉県	7	0.9	0.9	95.9
青森県	1	0.1	0.1	96.1
鹿児島県	5	0.6	0.6	96.7
三重県	9	1.1	1.1	97.8
熊本県	4	0.5	0.5	98.3
福島県	2	0.2	0.2	98.5
神奈川	1	0.1	0.1	98.6
茨城県	1	0.1	0.1	98.8
アメリカ	1	0.1	0.1	98.9
新潟県	2	0.2	0.2	99.1
富山県	1	0.1	0.1	99.3
徳島県	4	0.5	0.5	99.8
シンガポール	1	0.1	0.1	99.9
海外	1	0.1	0.1	100
合計	812	100	100	

アンケートの回答においては、居住地は、都道府県と市町村を書いてもらう方式にしていた。今回提示する表に関しては、兵庫県と大阪府に関しては、広範な氏子区域と言える「西宮市」を1項目とし、西宮神社のえびす信仰と関わりのある旧摂津地域（兵庫県・大阪府にまたぐ）、で2項目（大阪の旧摂津地域・兵庫の旧摂津地域）、それ以外の兵庫県と大阪府、そして、都道府県（兵庫県・大阪府）のみ回答という項目に分類した。それ以外の都道府県に関しては、市町村を回答してもらったが、あまりに多岐にわたってしまうので、都道府県のみにとまとめた。正確には西宮市には合併した地域（旧鳴尾村、旧山崎村）などが含まれており、厳密な意味の「広範な」氏子区域ではない。また、神戸市は「兵庫県・旧摂津地域」に含めたが、須磨区や北区の一部は旧摂津地域ではないこともある。しかし、大まかではあるが、旧来からのえびす信仰の盛んな区域とすることを考えたときには、ある程度説得性を持った分類になっていると考えられる。

出生地に関しては、前の表の通りとなった。西宮市が95名であり、全体の11.7%である。西宮と大阪・兵庫の旧摂津地域を含めると41.6%にあたる338名である。兵庫県全域で考えると251名（30.9%）、大阪府全域では170名（20.9%）であり、関西2府4県（兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山）では578名（71.2%）である。その他、東京、福岡、愛知、神奈川なども多いが、人口の多いところの出生地であることに留意する必要がある。

次に青年期での居住地を提示する。

青年期（から現在にかけて）過ごした（または過ごしている）場所

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
兵庫県のみ	2	0.2	0.2	0.2
回答				
西宮市	109	13.4	13.4	13.7
兵庫・旧摂津	163	20.1	20.1	33.7
兵庫旧摂津以外	81	10	10	43.7
大阪府のみ	7	0.9	0.9	44.6
回答				
大阪・旧摂津	90	11.1	11.1	55.7
大阪旧摂津以外	76	9.4	9.4	65
京都府	41	5	5	70.1
滋賀県	17	2.1	2.1	72.2
奈良県	17	2.1	2.1	74.3
和歌山県	9	1.1	1.1	75.4
広島県	11	1.4	1.4	76.7
神奈川県	19	2.3	2.3	79.1
北海道	4	0.5	0.5	79.6
東京都	18	2.2	2.2	81.8
福井県	3	0.4	0.4	82.1
宮崎県	3	0.4	0.4	82.5
福岡県	10	1.2	1.2	83.7
愛媛県	10	1.2	1.2	85
石川県	9	1.1	1.1	86.1
島根県	3	0.4	0.4	86.5
愛知県	26	3.2	3.2	89.7
岡山県	10	1.2	1.2	90.9
静岡県	4	0.5	0.5	91.4
山口県	2	0.2	0.2	91.6
佐賀県	1	0.1	0.1	91.7
栃木県	3	0.4	0.4	92.1
香川県	9	1.1	1.1	93.2
鳥取県	3	0.4	0.4	93.6
大分県	2	0.2	0.2	93.8
群馬県	5	0.6	0.6	94.5
埼玉県	6	0.7	0.7	95.2
岐阜県	7	0.9	0.9	96.1
高知県	1	0.1	0.1	96.2
宮城県	2	0.2	0.2	96.4
千葉県	7	0.9	0.9	97.3
青森県	1	0.1	0.1	97.4
鹿児島県	4	0.5	0.5	97.9
三重県	9	1.1	1.1	99
熊本県	1	0.1	0.1	99.1
福島県	1	0.1	0.1	99.3
茨城県	2	0.2	0.2	99.5
新潟県	1	0.1	0.1	99.6
徳島県	2	0.2	0.2	99.9
秋田県	1	0.1	0.1	100
合計	812	100	100	

青年期に過ごした場所に関しては、次の通りとなった。大半が20代であることを考えると現在の居住地に近い。西宮市が109名であり、全体の13.4%である。西宮と大阪・兵庫の旧摂津地域を含めると44.5%にあたる362名である。兵庫県全域で考えると355名(43.7%)、大阪府全域では173名(21.3%)であり、関西2府4県(兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山)では612名(75.4%)である。西宮市で青年期を過ごした、または現在住んでいる人たちが、小学生の時よりも増えている。それ以外の地域は、海外はなくなったが、それでも北海道・東北・関東・中国・四国・九州からと多彩な地域から来ていることが分かる。

こ 2 つの表の結果から、青年期になるに従って、旧摂津地域に住む人が多くなることが、分かった。特にデータが変動したのは、青年期に住んでいた(または住んでいる)場所のところでの「西宮市」である。これは現在、住んでいるところが西宮であるが、もともとは別の出身であり、何らかの移動で青年期から現在にかけて、西宮に移住してきた人を示す。そういう意味で、この神事が、西宮にきた新しい住民を受け入れている神事であるとも考えられる。歴史的な変遷から、地元の神事から関西一円の神事へと変貌したと考えていたが、夜を徹する神事でもあるので、生活場所からのアクセスも考えると、神社に近い西宮市や旧摂津地域からの参加がやはり多いことも明らかになった。

西宮(旧鳴尾村・旧山口村なども含む)から13%、旧摂津地域全体でみると45%程度、そして関西全体を合わせると75%程度であり、関西一円ということが出来るが、その関西全体の中で実に65%が「兵庫県(43.7%)」と「大阪府(21.3%)」で占めている。人口を考えると、この兵庫と大阪は京都を除くと圧倒的に多い。京都は、列車などを使うと地理的には近いが、青年期で40名程度(5%)と人口から考えるとあまり多いとは言えない。同時に25%が関西圏以外からで、九州から北海道まで幅広い地域から参加していることが、改めて明らかになった。

この出身地のデータ解析で明らかになった、大阪府と兵庫県からの出身者が多いが、2004年までと2005年から2015年までには何か変化があるのではないかと考える。参与観察としてではあるが、2004年までの参加の場合、物理的な制限から、出られる地域が限定されていたのではない。2001年から2004年までのデータとそれ以降の出身地のデータを見比べることで、具体的にどの地方からの参加者が増えたのか、ということを見ていきたい。

2001年から2004年の青年期の居住地に関しては、2001年から2004年までのデータを見てみると、西宮市が26名(21.3%)、旧摂津地域で66名(54.0%)、兵庫県全体で61名(50.0%)、大阪府全体で20名(16.3%)となっている。2001年から2015年までの通しで見た際よりも、比率としては西宮、もう少し広げて旧摂津地域からのパーセンテージが10%ほど高くなっている。

関西全体からは78.6%であり、この数字は2001年から2015年まで通した数字とさほど変わらない(75.4%)ことが明らかになった。テレビ放映もあり、全国から集まりだしてはいるが、2015年を通して見た、データから見ると県数の数が少ない。つまり全国的な広がりの上であると言える。2005年から2015年までのデータと事項にて見比べてみたい。

青年期 (2001-2004)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
兵庫県のみ	1	0.8	0.8	0.8
回答				
西宮市	26	21.3	21.3	22.1
兵庫・旧摂津	28	23	23	45.1
兵庫旧摂津以外	6	4.9	4.9	50
大阪府のみ	1	0.8	0.8	50.8
回答				
大阪・旧摂津	12	9.8	9.8	60.7
大阪旧摂津以外	7	5.7	5.7	66.4
京都府	9	7.4	7.4	73.8
滋賀県	4	3.3	3.3	77
奈良県	2	1.6	1.6	78.7
広島県	1	0.8	0.8	79.5
神奈川県	3	2.5	2.5	82
北海道	2	1.6	1.6	83.6
東京都	5	4.1	4.1	87.7
福井県	1	0.8	0.8	88.5
宮崎県	1	0.8	0.8	89.3
福岡県	1	0.8	0.8	90.2
愛媛県	1	0.8	0.8	91
石川県	2	1.6	1.6	92.6
島根県	1	0.8	0.8	93.4
愛知県	2	1.6	1.6	95.1
岡山県	1	0.8	0.8	95.9
栃木県	1	0.8	0.8	96.7
香川県	2	1.6	1.6	98.4
大分県	1	0.8	0.8	99.2
群馬県	1	0.8	0.8	100
合計	122	100	100	

青年期 (2005-2015)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
兵庫県のみ	1	0.1	0.1	0.1
回答				
西宮市	83	12	12	12.2
兵庫・旧摂津	135	19.6	19.6	31.7
兵庫旧摂津以外	75	10.9	10.9	42.6
大阪府のみ	6	0.9	0.9	43.5
回答				
大阪・旧摂津	78	11.3	11.3	54.8
大阪旧摂津以外	69	10	10	64.8
京都府	32	4.6	4.6	69.4
滋賀県	13	1.9	1.9	71.3
奈良県	15	2.2	2.2	73.5
和歌山県	9	1.3	1.3	74.8
広島県	10	1.4	1.4	76.2
神奈川県	16	2.3	2.3	78.6
北海道	2	0.3	0.3	78.8
東京都	13	1.9	1.9	80.7
福井県	2	0.3	0.3	81
宮崎県	2	0.3	0.3	81.3
福岡県	9	1.3	1.3	82.6
愛媛県	9	1.3	1.3	83.9
石川県	7	1	1	84.9
島根県	2	0.3	0.3	85.2
愛知県	24	3.5	3.5	88.7
岡山県	9	1.3	1.3	90
静岡県	4	0.6	0.6	90.6
山口県	2	0.3	0.3	90.9
佐賀県	1	0.1	0.1	91
栃木県	2	0.3	0.3	91.3
香川県	7	1	1	92.3
鳥取県	3	0.4	0.4	92.8
大分県	1	0.1	0.1	92.9
群馬県	4	0.6	0.6	93.5
埼玉県	6	0.9	0.9	94.3
岐阜県	7	1	1	95.4
高知県	1	0.1	0.1	95.5
宮城県	2	0.3	0.3	95.8
千葉県	7	1	1	96.8
青森県	1	0.1	0.1	97
鹿児島県	4	0.6	0.6	97.5
三重県	9	1.3	1.3	98.8
熊本県	1	0.1	0.1	99
福島県	1	0.1	0.1	99.1
茨城県	2	0.3	0.3	99.4
新潟県	1	0.1	0.1	99.6
徳島県	2	0.3	0.3	99.9
秋田県	1	0.1	0.1	100
合計	690	100	100	

前記の表が、2005 年から 2015 年までの参加者が青年期を過ごした場所である。2001 年 2004 年の同じ属性データと見比べてみたい。

西宮市が 83 名 (21.3→12.0%)、旧摂津地域で 296 名 (54.0→44.8%)、兵庫県全体で 294 名 (50.0→42.6%)、大阪府全体で 153 名 (16.3→22.1%) となり、関西全体で 525 名 (78.6→74.7%) となっている。比率で見ると、西宮地域や旧摂津地域、そして兵庫県全体からの参加者が減っており、その部分を大阪の摂津以外の地域 (旧河内・旧和泉) からの参加者や、他の関西の参加者にとってかわったともいえる。そしてこの 10 年で、日本各地から参加者が来ていたことを改めて感じる。

6. 考察と課題

これらのデータから、明らかになったことを列記したい。

- ① 2001 年から 2004 年までの男女比より、2005 年からの男女比のほうが、男性の比率が高くなっていること。
- ② 2001 年から 2004 年までは陸上経験者が群を抜いて多かったが、2005 年以降ではそれ以外のスポーツ経験者も数多く参加していること。
- ③ 女性に関しては、男性よりも陸上競技経験者の比率が高いこと。
- ④ 2001 年から 2004 年までに比べて、2005 年から 2015 年までの方が全体的な年齢層が上がっている。依然として学生・生徒の参加が多いことは事実だが、2005 年以降は社会人の参加も多くなっていること。
- ⑤ 全体のデータを見た際に、出生地から青年期になると、関西地域、特に西宮に移動してきた人が多くなる。つまり、何らかの形で西宮へ移住した人が、多数参加していること。
- ⑥ 2001 年から 2004 年のころは、その参加形態から、西宮、旧摂津地域が多い。2005 年以降では、大阪府全体での比率は上昇しているものの、旧摂津地域、西宮市からの比率は下落している。

以上の点から、この 10 年以上の間に当神事がどのような変遷をたどったのかを考えると、「開門神事福男選り」と言う言葉が普及し、「男性の行事」と言う語感が広まっていること。同時に女性の参加者は、男性よりもより走りの専門家として、参加しているのではと感ぜられる。

2005 年の変更点の結果が如実に出ているのが、④と⑥であろうか。神事の催行までの間の待ち時間が減ったために、年齢層が広がり、それにしたがって社会人の参加者が増えたことが考えられる。同時にそれまでの旧摂津地域の人々が多く参加していた 2004 年までから、2005 年以降は、日本全国からの参加者が増えたが、大阪の旧摂津地域外 (旧河内・旧和泉) 地域の参加者が増えている。全国から来ているので、当神事がメディア (インターネットを含めて) を通じて、全国的な認知度は高まったが、実際参加するという次元まで考えると、十日戎開門神事の汎関西化が進んだということになるのではないかな。もともと旧河内・旧和泉地域では、西宮神社の十日戎に参詣する習慣はなかったといえる。十日戎を祝う文化圏であるが、その参詣対象としては近辺の戎社への参詣、少し遠出をして大阪市内の今宮戎神社・堀川戎神社と言ったところではないだろうか。その参詣客が同じえびす信仰でありながら、地域的には遠

いと考えられる、西宮神社に意図しない形で「結果的に」参詣している事実は、これまでの各地でのえびす信仰・参詣の形態を考えると興味深い。この調査によって、参加者が日本全国から来ている事実も驚愕に値するが、この十日戎における参詣の「地域的な棲み分け」を揺るがしていることがこれらの分析から改めて明らかになった。

開門神事に参加すると言うことだけで、全国から集まる。つまり地縁や社縁のない状態で祭事に参加する。これは、上野千鶴子⁶や松平誠⁷の言う「選択縁」の祭事であると言える。選択縁の祭事として考えられるのは、内田忠賢⁸、矢島妙子⁹らが調査した高知の「よさこい祭り」や北海道の「YOSAKOI ソーラン祭り」、そしてそこから全国へと広がっていった「よさこい系」祭りの系譜へとつながるだろう。

この神事に関しては、属性を見る限り、多様な場所から訪れており、「門が開き、拝殿までを一斉に競争する」と言う部分でのみつながっている。その意味では「選択縁」と呼ぶことには差し支えないと考える。この神事を 2005 年以降理解するとき、興味深いのは選択縁で集まったと言える参加者が、事件をきっかけとして、神社側の働きかけによって呼応し、新しく神事を新しい形で運営を始めたことである。このようなケースは、祭礼研究の中でも稀なケースであると言える。「選択縁」で出会った人々をいかに束ね、それらがいかに新たな祭事の展開をさせるのか。これからの社会のイベントや祭礼を考えていくときに、この西宮神社で行われている事例が応用できる時が来るのではないかな。

アンケートでは、動機の分析および感想の分析に関してさらに検討を行わなければならない。人はなぜ参加してきたのか、そしてこれからしていくのか。その動機や感想を分析し、インタビューをさらに行うことで、この神事の現代的な社会における機能の考察を行うことが、今後の課題である。

(2015 年 11 月 9 日 受理)

¹ 当時の 1 月 10 日が連休にあたっていたことで、この騒ぎがかなり大きくなったともいわれた。「荒れる成人式」の画像が多数流される中で、同じ時間帯に同じような報道の形でこの妨害事件が全国ネットで放映したのである。さまざまな形で取材を試みようとする取材陣が多かった。

² これは H.R. 氏の名字に福男になった人物と同じ字が含まれており、誤解もあって、その人物と誤認され、彼の掲示板が荒らされた経緯がある。沈静化するまで時間を要した。

³ この開門神事を残すか否かの会議には、私も出席した。H.R. 氏も残すことの大切さを訴えたが、なぜかこの時、私はこの神事をなくしてはならないと涙ながらに訴えた。一調査者としてフィールドに入っているのみであり、「涙ながら」に訴える必要はないはずである。そこまでこの神事に感情移入していたのだろうか。今となれば、恥ずかしい話でもあるが、自らの調査から考えるとひとつの分岐点になった出来事である。

⁴ これらの事故から、かぶりものなどが禁止されていった。現在では神事を行う前に、服装の確認が、講社員によって行われている。

⁵ 彼に関しては、体育科の教諭であると同時に、1990 年代後半から 2000 年代にかけて、何度も一番福となった Y 氏との交流もあり、突然思い立って参加したわけではなく、知り合いとの関係性があったとも言える。

⁶ 上野千鶴子「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』1984 世界思想社、pp.45-78

⁷ 松平誠『都市祝祭の社会学』1990 有斐閣

⁸ 内田忠賢「変化しつづける都市祝祭—高知『よさこい祭り』」『生活学』24(2000)、ドメス出版、pp.130-147

⁹ 矢島妙子『「よさこい系」祭りの都市民俗学』2015 岩田書院